

# 正課外活動を通じた学生の成長



学生部長・法学部教授 佐藤敬二

## 学びと成長にとっての 正課外活動の役割

立命館大学に学ぶ約3万3千人の学生のうち、大学が把握している課外自主活動団体についてだけでも、約半数の学生が加わって活動しています。大学の部局が組織している学生スタッフ、学生間の自主的集まりや大学外の団体などへの参加も考慮に入れば7割程度の学生が何らかの正課外活動を行っているものと推測されます。学生の学びと成長を語る際には、ともすれば正課での学びにのみ目がいきがちです。しかし正課での学びが進むのは、実はこのような正課外活動が正課で学ぶための前提的力を養成していたり、具体的現実との関係で実践していたりすることによる側面も大きいのです。正課での学びが多様に展開しているものの、依然として正課では得られない力を正課外活動の中で獲得しています。

立命館大学の課外自主活動は、他の大学と比べてその参加者数が多いというだけでなく、組織的な取り組みに優れているという際立った特徴も持っています。様々な大学のサークルが集まった組織の事務局を担っていることも多く、たとえば京都学生祭典のような大学横断的な取り組みでは、その中心を担っているのは本学の学生であったりします。それは社会的視野をもつことにもつながり、ここに、立命館学生文化の育つ土壌があります。そのため大学も、直轄の企画を実施するとか個別学生を支援するというよりも、学生たちが自主的・集团的に取り組むことを支援するという形での支援を積み重ねてきています。



## 人との「係わり」を避けない 活動経験の重要性

学生の成長にとって正課外活動に取り組むことが必須であると私は考えています。その理由は、正課外活動で学生がさまざまな力を培っているからでもあります。しかしそれだけではなく、第一に、青年期の学生にはその意欲や学びのスタイルが少しのきっかけで短期間に大きく変動するという特徴、また、他人に干渉したくないという現代学生の気質、がみられるからです。第二に、立命館大学に学ぶ学生の特徴である多様性を、個々の学生の学びと成長につなげたいと思うからです。

私はかつて60人強の学生を一回生から四回生まで継続的にヒアリング調査をしたことがあります。また、現在策定している新中期計画に資するために、四回生の学生にこれまでの大学生生活を振り返ってもらうヒアリングを行いました。そこで見てきたことは、入学時には高い意欲をもっていた学生も、後から振り返りかえれば、あるいはまわりから見れば「些細な」きっかけによって意欲を失ってしまったり、逆に、少しのきっかけで意欲が急上昇していく姿でした。意欲が急上昇する契機には様々なものがあるのですが、多くの学生が語ってくれたのは他人からの刺激によるものでした。先輩の姿、同学年の友人、後輩、専門的志向をもっている者についてはその道のプロ、地域の人々、等等。正課の中でこれらの刺激を受けることもありえるとは思いますが、圧倒的に多数は、正課外活動の中で受けたものでした。それは単に、そのような人を「見た」だけでは効果はありません。「係わる」ことが必要です。ところが現代学生は、他人に干渉しない干渉されたくないという気質をもっていますので、「係わる」ことを避けようとする。正課外活動の中において、係わらざるを得なくなることが重要であると思うのです。

多様な人々に係わることができる点で立命館大学は他の大学にない利点を有しています。第一に、学生の出身地が多様です。関西圏出身者は全体の半分にすぎず、全国から学生が集まっていることが、関西私学の中で際立っていると同時に、全国的にも有数の比率になっています。第二に、国際学生の多さもあげられます。立命館アジア太平洋大学ほどの比率ではありません

が、1000人を超える国際学生が正規学生として学んでいますし、短期の学生としてまた多数の国際学生が学んでいます。第三に、得意とする領域の多様な学生が学んでいることです。多様な入試形態を採用することで、それぞれに得意な領域をもった学生が集まってきています。その他にも、年齢層、経歴、志向など、様々な面での多様性をあげることができます。この多様な学生たちが相互に影響しあうという面において十分な効果を挙げているとは言いづらいのも実情です。正課における工夫も必要ですが、正課外活動に期待されることは大きいと思っています。

## 正課外活動を通じて培う力

正課と正課外活動の両方を通じて、学生は学び成長していきます。正課においても、従来は正課外活動で行っていたような訓練や自主的学びを組み込むことが増えていますし、正課外活動



においても正課に連動した内容であることもありますので、両者はボーダーレスです。しかしあえて、昔ながらの講義形式の正課と、組織的にもしっかりと

自主的活動を行っている正課外活動を比較した場合、正課外活動を通じてこそ培うことのできる力をいくつか指摘することができます。

第一に、それが自主的活動であることから、企画力、行動力、応用力、積極性、といった力が培われます。正課の場合には、教員主導で学生は受身になりがちです。教員は教育のプロですから教育効果があがるように企画されたものが提示されるため、学生はそれにしたがって学んでいけば力がつくこととなります。それに対して、正課外活動では自らが企画していくこととなります。多くの学生にとっては初めての経験でもあり、容易ではあり

ませんが、人間として、あるいは社会にでてから必須の能力を身に着けることができるのです。

第二に、組織的活動であることから、組織性、精神面での成長(耐性、自己肯定感)といった力が培われます。自ら組織活動を行うことは、楽なことではなく、とりわけ人間関係において多くの困難に遭遇します。大学に進学する目的として友達を作りたいと答える学生が増えていますが、通常の友達つきあいだけだと、お互いに嫌なことは避けて通るということも多くみられます。とりわけ、社会に出てからはこのような関係が多くなります。しかし、正課外活動においては人間関係と格闘せざるをえず、ここで得られるものは学生時代にだからこそ貴重なものであると思います。

第三に、倫理性、社会性(対人関係や調整力)を得ることができます。学生はこれまで「子ども」としての位置にいましたが、大学では、そして正課外活動を進めるにあたっては、自立した人間であることが求められます。ここから倫理性、社会性を獲得することができるのです。

## 大学による支援の考え方

このような正課外活動を促進することは、学生の学びと成長を果たすことを目的としている大学の重要な役割です。立命館学園が策定に向けて議論を続けている新中期計画においては、立命館大学では次のような考え方で正課外活動を支援しようとしています。

全学生を対象とし、学生による自主的・集团的取り組みを支援することを基本とし、大学は参加できる仕組みの可視化や施設も含めた条件整備に力をそそぎ、成長を学生自身が認識し評価できる仕組みを整える、という視点で支援していきます。その上で、全学生が何らかの正課外活動に取り組むこと、社会への発信と連携を促進して地域交流と連携・国際交流と連携が盛んとなる状況をつくること、団体の活動水準の高度化とそれを通じた社会の発展に貢献すること、をめざしています。父母の皆様からも、積極的にご援助をいただけますようお願いいたします。